

# デュッセルドルフ（ドイツ）のトルコ人集住地区の街頭映像に 現れた宗教／エスニック表象に対する社会学的分析の試み

—都市におけるムスリム移民の生活文化と宗教的表象についての考察—

山中 速人<sup>1)</sup>  
井藤 聖子<sup>2)</sup>

## A. 研究の射程とアプローチ

本稿は、ドイツ（デュッセルドルフ）のトルコ人集住地区における宗教／エスニック表象の映像による試行的な調査研究<sup>3)</sup>に関する報告と若干の考察を行うものである。

本稿の2名の執筆者は、ともに科研費研究「可視化する地域社会の宗教／エスニック文化の比較映像分析～大阪生野とイスタンブール」<sup>4)</sup>の一環として、2012年9月にイスタンブールの3つの街路を選び、その街頭景観に現れた宗教／エスニック表象を映像で記録し、比較する調査を行った。その際の調査法と同じ手法を用いて、デュッセルドルフのトルコ人集住地区における宗教とりわけイスラム教とドイツにおけるエスニック・マイノリティとしてのトルコ人の宗教／エスニック表象の観察と分析を試みた。

イスタンブール調査で用いた調査手法<sup>5)</sup>とは、ビデオカメラをカメラスタビライザーに装着し、地域社会の街頭景観を切れ目なくシームレスに連続撮影するというやや特殊な撮影方法を用いるものであった。具体的には、(1) 移民たちが生活する地域社会の中心的街路を対象とし、(2) ビデオカメラにワイドレンズとスタビライザーを装着して、(3) 対象とする街頭景観を前向きの方角で連続撮影した。

さらに、この方法によって収録された映像に対して、今和次郎の考現学<sup>6)</sup>を参考に、映像に記録された宗教表象として、とくに女性の被り物に注目し、その形態上の分類、つまりバシュオルトゥス (Baş örtüsü)、トゥルバン (Türban)、チャルシャフ (Çarşaf) の頻出度を計測し、地区別に比較することを試みた。

このような調査研究が目的とするところは、イスラムの宗教的アイデンティティにかかわる表象とその可視化をめぐる変化の特徴と方向を記述することであり、その際、イスタンブールの複数の地区で比較を行い、今日のイスタンブールにおける宗教的表象が、都市内部の地域特性とどのように関係し、可視化されていくのかを明らかにすることにあつた。この研究の結果は、「都市における宗教的表象と地域のアイデンティティ～イスタンブール（トルコ）における街頭映像の記録と分析～」<sup>7)</sup>として公表されたが、この研究であきらかになったことを要約すると、つぎのようになる。

デュッセルドルフ（ドイツ）のトルコ人集住地区の街頭映像に現れた宗教／エスニック表象に対する…

特定のイスラム教団の本部があり、その影響の強いチャルシャンバ（Çarşamba）地区では、映像に現れた女性の81.9パーセント、男性の12.3パーセントが、イスラムの習慣に従った服装を着用していた。他方、学生層の居住が多く、かつ世俗主義政党出身の首長が統括する自治体に含まれ、世俗的傾向の強いベシククタシュ（Beşiktaş）地区の2つの街路、ウフラムール街（Ihlamur dere Cd）とバルバロス街（Barbaros Blv）では、イスラムの習慣に従った服装を着用している人は、女性に少し見られた。（ウフラムール街11.2%、バルバロス街5.4%）しかし、男性には一人も見られなかった。イスタンブルにおいては、イスラム的表象が街頭に現れる程度は、地域によって、またジェンダーによって差があり、地域ではチャルシャンバ地区に、ジェンダーでは女性に強く現れる傾向がみられた。

このように、イスタンブル調査では、同じイスタンブル市内でも、地区の性格やジェンダーによってイスラム表象の現れ方に違いがあり、それぞれの地域の宗派的／文化的特性に応じて、その特徴を明らかにすることができた。

さて、この調査を行ったあと、我々の研究関心は、トルコ社会における宗教／エスニック表象が、たんにトルコ社会の内側にとどまらず、今日のグローバル化する世界においてどのような広がりをもとうとしているかについても及ぶようになった。というのも、グローバルな市場経済の拡大に伴って、それと補完的關係にある多文化社会状況の浸透は、海外から労働力を受け入れてきた先進諸国において顕著であるのだが、それは、逆に労働力を提供する側の社会からみれば、もともとは、当該の社会内部で育まれてきた宗教／エスニック文化がトランス・ナショナルなレベルで拡散していくことを意味するからである。ヨーロッパで、トルコ人が労働者として国外移住する対象国の筆頭はドイツである。第2次大戦の終了以来、多くのトルコ人労働者がドイツで外国人労働者として就労し、その多くがドイツ社会に定着を示した。今日、ドイツにおけるトルコ人は移民集団として最も大きなエスニック・セクターの一つであり、同時に、その社会統合は、ドイツにおける社会問題の重要かつ困難な課題の一つとなっている。このような在ドイツ・トルコ人たちの集住地区を対象にその宗教／エスニック表象を観察し、本国のそれと比較することで、在ドイツ・トルコ人の文化変容やエスニック・アイデンティティの位相の一端を探りたいと考えた。今回の調査は、そのような問題関心のもとに実施された。

ただ、今回の調査は比較的短期の滞在期間において、対象地区の視察と収録を行わなければならなかったもので、イスタンブル調査のようなきめ細かな事前の準備と予備調査は行えなかった。よって、今回の調査は、あくまでも今後の本格的な研究のための予備的研究にとどまるものであることを断っておきたい。

ところで、ドイツにおけるトルコ人移民社会への関心は、日本では、もっぱらヨーロッパ、とりわけドイツにおける外国人労働者政策や移民政策の成否への関心として存在する傾向にある。それは、あくまで移民を受け入れるドイツ社会の側に視座を置いた関心であり、社会

統合に関する政策論的検討や移民の人権問題など、ホスト社会側への関心が背景にあるとい  
ってよい。これに対して、我々の視点は、移民を送り出す側、つまりトルコ社会の側に視座  
を置いて、移住者の宗教／エスニック文化の保持や変容を捉えようとするものである。移民  
社会の研究は、ホスト側と移民側の両方からのアプローチがあっはじめてバランスがとれ  
たものとなる。ともすれば、トルコ人を政策対象として客体的に扱う傾向を帯びがちな従来  
の研究に対して、今回の研究は、トルコ人側からの視点を補うこと<sup>8)</sup>で、その空白部分を  
補完する意義が少しくあるものとする。

## B. 対象地区の選定と撮影方法

さて、今日、ドイツにおける最大の移民集団はトルコ人である。そのドイツのトルコ人集  
住地区において、イスタンブール調査で用いた研究手法と同様の方法によって、街頭景観の映  
像による記録を行い、同様の方法で分析を行うことで同地区の宗教／エスニック表象の抽出  
を行うことにした。我々が選んだ都市は、デュッセルドルフである。

デュッセルドルフにおけるトルコ人住民について概観すると、デュッセルドルフ市の総人  
口約64万人（2018年推計）中、トルコ系住民の占める比率は、8.8パーセントで、非ヨー  
ロッパ系としては一番大きなエスニック・グループを

形成している<sup>9)</sup>。市内にはいわゆるトルコ人街と呼ばれる街路が市の中央駅周辺に展開している。今回、取  
録対象として選んだのは、デュッセルドルフ中央駅から市内電車（地下鉄）を南に一駅下ったオーバービルカ  
ーマーケット（oberbilker markt U）駅の駅前広場の東  
角の交差点よりケルナー通り（Kölner Str.）を南へ1  
ブロック下がったヘーア通り（Heerstrasse）との交  
差点までの間の約350メートルの街路である。（地図

地図 1



1 参照、写真 1 参照) このケルナー通り

に展開する街並みは、トルコ人たちの商  
業施設として中心的な位置づけを担い、  
上下2車線の自動車道路を挟んで、トル  
コの物品や生鮮食品を扱うスーパーマ  
ーケット、安価な衣料品を扱う衣料品店、  
串焼きの羊肉（シシ）を提供するトルコ  
料理店やパンや菓子を売る商店、イスラ  
ム式の女性衣料品を販売する女性用衣料

写真 1 デュッセルドルフのトルコ人街の商店街



写真2 ビデオカメラ映像例



北上しながら撮影を行った。使用したビデオカメラ<sup>10)</sup>は、デジタル・スタビライザーを内蔵しており、また、広角での撮影を念頭に設計されているため、カメラを腰高の位置でレンズを前方向にして構え、モニターでの視認はあまりおこなわず、ゆっくりと歩道を歩きながら、前方に展開する光景を撮影していった。写真2は、撮影された動画から、1フレームを参考例として示したものである。撮影には、広角による画像の歪みが生じない程度に広範に撮影できる広角レンズを選んだ。

撮影を行った時期は、2018年6月12日の正午を少し回った12時30分頃である。

なお、本論文に掲載される写真については、対象者のプライバシー等の権利を保護するため、個人が特定できないよう顔の部分に対してマスキング等の編集をおこなった。

### C. 撮影された映像に現れた宗教／エスニック表象

トルコ人街で撮影した動画とスチルカメラで撮影した静止画から、トルコの宗教的／エスニック表象を選びだし、その映像から、この街におけるトルコ文化、そして、イスラムとしての宗教的特徴を示す事象を列挙してみたい。

写真3 トルコ人街のドネル屋



品店、装身具やカバンなどの雑貨を提供する雑貨店などが並んでいる。店舗のレイアウトや表示もイスタンブールの商店などで見かける形式に類似しており、イスタンブールの中規模な商店街を思わせる佇まいを呈している。

このケルナー通りを、ヘーア通りとの交差点から駅前広場の交差点まで、北方方向に向かって、東側の歩道を歩行速度で

まず、商店の店頭に掲げられたトルコ語による商店名や宣伝ポスター、商品名などの掲示物が挙げられる。写真3は、トルコのスナックとして一般に知られるドネルを食べさせる軽食店であるが、その店名である「BABA」は、トルコ語で「父親」の意味である。また、トルコ語で「月と星」(ay yıldız)と書かれた宣伝看板が歩道にせり出して置かれている。(写真4参照)この看板は、携帯電

話販売店の看板であるが、「月と星」とは、トルコ国旗のモチーフであり、ここがトルコ人経営の商店であることを示している。これらトルコ語によって表された看板や掲示物は、一つの明瞭な文化表象であり、映像記号論的な言い方をすれば、トルコ文化の直接的な類似記号（アイコン）<sup>11)</sup>の典型であると言えるだろう。この街を訪れた人々は、これらのトルコ語に接することによって、ここがトルコ人街であることを明瞭に理解するのである。

つぎに、これらの商店の店頭と並べられている商品や商品見本、写真が、トルコの生活文化や食習慣と強い関連をもつことによって、この街がトルコ人の街であることを読み解くことができる種類の表象が存在する。

たとえば、イスラム式の女性服飾品を販売する店頭で飾られたトゥルバンを被ったマネキンがそうである。(写真5参照) また、写真6や写真7は軽食店のメニューを店頭に掲げたもので、ピデ (pide) やチャイ (çay) (写真6参照)、スイミット (simit) やポアチャ (poğaç) などのパン類やトルコ式のカフェバルトゥ (kahvaltı=朝食) (写真7参照) など、トルコのカフェテリアなどでよく見られる軽食のメニューが並んでいる。これらの写真見本には、ドイツ語でおおむね商品名や価格が掲示されている<sup>12)</sup>が、これらの食品は、トルコ人の生活文化や食生活に密接に関連している。また、パン屋の店内のショーケースに並

写真4 携帯電話販売店看板



写真5 トルコ婦人服飾店



写真6 ピデなどトルコ軽食の掲示



写真7 トルコ料理店のポスター



写真8 トルコ人街のパン屋



べられた特徴のあるパン類をみれば、このパン屋がトルコ人のためにパンを売る店であることがわかる。(写真8参照)

これらの表象は、トルコ語の文字表記のように直接的ではないが、間接的にこの街がトルコ文化と深く結びついていることを示している。映像記号論的に言えば、これらの品々や掲示物は、トルコ文化を示す指標記号（インデックス）<sup>13)</sup>といえるだろう。そして、付け加えれば、これらの指標記号がトルコ文化を指し示していることを読み解くには、トルコの生活文化への一定の知識と経験を要するのである。たとえば、写真9は、この商店街にある女性用婚礼衣装を扱う商店のショーウィンドウの写真であるが、ここに飾られた一見ありふれたウエディング

写真9 ショーウィンドウのウエディングドレス



ドレスから、それを着用する女性がトルコ人であることを読み解くには、トルコの結婚式では、多くの場合、花嫁はウエディングドレスの上に赤いリボンを重ねるのが風習であることを知っている必要がある。これらの指標記号としての街頭表象に対する知識や経験の深さに応じて、この街がトルコ人の街であることについての認識も深まっていくといえるだろう。

最後に、とりわけ宗教的な表象として取り上げたいのが、女性の服装である。この街を歩けば、他の一般的なドイツの街路では見かけることが稀な、被り物をした女性の姿を容易にみることができる。(写真10参照) 一般的にヨーロッパでは、ムスリム女性の被り物を「スカーフ」と総称し、それが女性に対してのみ課せられたイスラム教の規範を象徴するものとして理解されている。そして、その理解

は見る者の宗教的信条やジェンダーをめぐる価値観に密接に関連し、かつそれを微妙に反映している。

したがって、この街を訪れる人々は、被り物を身に着けた女性を見ることによって、この街とそこに集う人々がイスラム教の影響下にあると容易に察知できると同時に、そこには、この街を見る人々

写真10 スカーフを被った母親



の情緒的、道徳的な感情が分かちがたく伴われているといえるだろう。ある人にとっては、身近で親しみのある存在として、しかし、逆にある人にとっては、異質で受容不能な存在として。女性の被り物は、トルコ文字で表示された掲示物やトルコの食材や生活財など事実を示す記号とは異なって、好嫌感情や道徳的評価などを含んだ意味づけを見る者に与える非常にセンシティブな表象である。というのも、それを見る者の宗教観や民族感情を刺激し、好意や嫌悪の感情を惹起する微妙で繊細な文化的宗教的象徴だからである。映像記号論的にいえば、この女性の被り物は、宗教と結びついた象徴記号（シンボル）<sup>14)</sup>として人々の視界の中心部分に君臨しており、それがどのような現れ方をするかで、それを見る人々のこの街に対する印象が決定されるきわめて重要な要素であるといつてよい。

そこで、次の章では、この女性の被り物に焦点を合わせて、それが街頭においてどのように出現し、どのような特徴を有しているのか、現代イスタンブールの街頭における女性の被り物着用事例と比較する中で、検討してみることにしたい。

#### D. 女性の被り物の出現頻度とその特徴

この対象とする映像の中に出現するイスラム様式の被り物や服装について、考現学的な分析を行った。

ここで、本調査が採用したイスラム式の服装に関する概念と分類基準について示しておきたい。この概念と分類基準は、先行して行われたイスタンブール調査のものを踏襲している。

イスラム様式の女性の被り物については、一般的にスカーフと総称されている。しかし、実際には、トルコ女性の被り物としてみれば、その形態はきわめて多様であると同時に、それが文化的／宗教的アイデンティティとして内包する意味づけも多様である。

そこで、現在のトルコで一般的に女性の被り物を指す、チャルシャフ（Çarşaf）、バシユオルトゥス（Baş örtüsü）、トゥルバン（Türban）という3つの概念を分類のための判別基準として採用することにした。この3つの概念は、トルコでもっともよく使われている辞書のひとつである Türkçe Sözlük 1, 2<sup>15)</sup>によれば、以下のように定義づけられている。

1) バシユオルトゥスは、「女性の髪の毛を覆うために使われている覆い」<sup>16)</sup>

2) つぎに、トゥルバンは、「頭を強く締め付けるために薄い布で作られたバシユオルトゥスの一種」<sup>17)</sup>

3) また、チャルシャフは、「昔女性が使っていた、頭からかぶり、肩から下方に垂れている広くて袖のない、外出用の上着とスカート」<sup>18)</sup>

また、この3つの概念による分類は、2003年にトルコにおける女性の被り物についての実態／意識調査を行ったミリエツト紙が使用したものである<sup>19)</sup>。それによると、3つの分類概念には次のような説明がなされている。

デュッセルドルフ（ドイツ）のトルコ人集住地区の街頭映像に現れた宗教／エスニック表象に対する…

写真 11 チャルシャフ



写真 12 バシュオルトゥス



写真 13 トゥルバン



1) チャルシャフ：女性の頭部からつま先まで覆い隠すための外套様の衣服を指すことばである。身体の線をあらわにしないデザインを特徴としている。

2) バシュオルトゥス：頭部と頭髪を覆い隠す布／衣服を広く意味することば

3) トゥルバン：バシュオルトゥスに分類される衣服の中でも、とくに都市部に住む教育をうけた若い女性が自己主張をもって、あるいはファッションとしての意識をもって着用する衣服を指すことば

また、トルコのジャーナリズムにおいては、さらに多義的な意味付けを示唆する見解もある<sup>20)</sup>。それによると、バシュオルトゥスには、「農村的」「没個性的」「非政治的」「低学歴」「慣習性」などの意味が込められ、さらに形態的にも「ルーズで頭部が見え隠れする」ものという意味が含まれている。他方、トゥルバンには、「都市的」「個性的」「政治的」「高学歴」「ファッション性」などの意味が込められ、また形態的にも「きちりと固定されていて頭部が完全に隠れている」ものという意味が含まれている。この定義をみれば、バシュオルトゥスとトゥルバンについては、たんに形態的な差異だけではなく、今日の文化的文脈においては、個人の宗教的アイデンティティ、さらに政治的なアイデンティティや価値観とも結びついた差異が存在していることが分かるだろう。以上の3つの概念をイスタンブール調査で収録された映像の中から、具体的な事例として示すと写真11がチャルシャフ、写真12がバシュオルトゥス、写真13がトゥルバンとなる。これらの3つの概念とその分類基準にもとづき、映像をハイビジョンモニターで上映し、映像を視聴しながら、項目ごとにその数を測定していった。計数の対象となった項目は以下のとおりである。

- 1) 映像に現れた、判別可能な対象者すべての人数
- 2) 男女（ジェンダー）<sup>21)</sup> 別の人数
- 3) 女性について、被り物の種類別（チャルシャフ、バシュオルトゥス、トゥルバン、被り物なし）の人数
- 4) 男性について、イスラムの様式に従ったジュッベ（Cübbe）と呼ばれる長衣やタッケ（Takke）と呼ばれるつば

なし帽（あるいはその両方）を着用している人数

以上の4項目について、その出現数を算出した。その結果は、以下のとおりである。

表 1

	男性	女性			合計
全数	69 (53%)	61 (47%)			130 (100%)
イスラム式の被り物(服装)を着用している	0 (0%)	13 (全女性中 21%)			13 (10%)
		チャルシャフ	トウルバン	バシュオルトゥス	
		0	13	0	

撮影を行った時期は、2018年6月12日火曜日の正午をすこし回った時間である。週末の休日ではない平日の日常生活が展開されていることを期待して、この時間帯を選んだ。

映像に記録された人々の総数は、130人であった。そのうち、男性と判別されたものが69ケース（53パーセント）、女性と判別されたものが61ケース（47パーセント）あった。これら男性と判別されたケースのうち、イスラム様式のジュッペやタツケを身に着けているものは皆無だった。他方、これら女性と判別されたケースのうち、イスラム式の被り物をしている者が13ケース（全女性ケース中の21パーセント、全数のうちの10パーセント）だった。このイスラム式の被り物をしている女性のうち、トウルバンを被っている者が全数であ

写真 14-1～写真 14-13 トルコ人街のトウルバン女性



写真14-1 写真14-2 写真14-3 写真14-4 写真14-5 写真14-6 写真14-7



写真14-8 写真14-9 写真14-10 写真14-11 写真14-12 写真14-13

デュッセルドルフ（ドイツ）のトルコ人集住地区の街頭映像に現れた宗教／エスニック表象に対する…

り、チャルシャフを被っている者はなく、また、バシュオルトゥスを被っている者もなかった。写真 14-1 から写真 14-13 までの画像は、これらトゥルバンを被っている女性の全身像を動画から切り出したものである。これらの画像に共通してみられる特徴を次に述べたい。

まず、これらの全 13 ケースについて、すべての女性がトゥルバンと分類できる被り物を被っていたが、このうち、写真 14-2、写真 14-6、写真 14-10 のケースは、トゥルバンを被り、膝丈ほどのコートと長いズボンを着用していた。他方、それ以外のケースでは、女性はすべてトゥルバンを被り、すべてくるぶしにとどくパルト (palto) と呼ばれる長くゆったりとしたコート様の衣服を着用していた。しかし、小さな差異はあるものの、これら 13 のケースの女性のほとんどが、非常によく似た外見を示していたのである。つまり、長くゆったりとしたコート様の衣服を着用し、トゥルバンの着用法としては、首に巻き付けることはせず、後頭部から背中にかけてなだらかに垂らしかけていた。そして、これ以外の着用の形式を見ることはなかった。

デュッセルドルフのトルコ人街で観察されたトゥルバン着用ケースにおける外見の類似性を示すために、イスタンブル調査で記録されたトゥルバンをかぶる女性たちの事例を、比較対象として、いくつか示してみたい。(写真 15-1 から写真 15-5 参照)

写真 15-1、写真 15-2 は、比較的低い年齢層 (10 歳代後半～20 歳代前半) のトゥルバン着用例である。また、それらよりすこし上の世代と思われる (20 歳代後半～30 歳代) の

トゥルバン着用例が、写真 15-3、

写真 15-1～写真 15-7 イスタンブルのトゥルバン女性



写真 15-1 写真 15-2 写真 15-3 写真 15-4

写真 15-4、写真 15-5 である。さらに、さらにその上の世代 (40 歳代以上) に当たる事例が、写真 15-6 や写真 15-7 である。これらのトゥルバン着用例をみると、同じトゥルバンでも、ずいぶんと異なった着用法を採用していることが分かる。たとえば、写真 15-2

の若い女性は、体に密着した T

シャツを重ね着しているし、写真 15-3 の子育て期の女性は、白いカーディガンとジーンズを着用している。また、同じく子育て期の女性 (写真 15-4 参照) は、腰までの短いトップスに白いロングスカートを着用している。また、トゥルバンの下にボネ (bone) と呼ばれるボンネットを後頭部に装着する着用法



写真 15-5 写真 15-6 写真 15-7

を試みている写真 15-1 や写真 15-2 のような事例もある。さらに、トゥルバンを首に巻き付けるように着用するケース（写真 15-1, 写真 15-3, 写真 15-4 参照）もあれば、首に空きつけず後頭部から背中流す着用例（写真 15-5 参照）もあった。このように、イスタンブルにおけるトゥルバン着用例は、年齢階層にかかわらず、非常に多様な形態をとることが分かるだろう。

一方、これらイスタンブルにおけるトゥルバン着用例と比べて、デュッセルドルフのトルコ人街で観察されたトゥルバン着用例は、あきらかに、その外見の類似性を特徴としていたのである。このような類似性が何に起因するのか最後に考察し、結論に代えることとしたい。

## E. 考察と課題

フィールドワークによって得られた映像データを分析する際、対象者集団にその映像を観てもらい、対象集団自体による解釈や評価を求める映像誘発法は、効果的な映像分析の手法である。<sup>22)</sup> この調査においても、研究協力者であるトルコ人女性に映像を観てもらい、映像に捉えられたデュッセルドルフのムスリム女性が、なぜ被り物など服装に外見上の同質性を示しているかについて見解を求めた。この協力者は、イスタンブル調査をはじめ、トルコでの調査活動全般に協力してくれている、イスタンブル在住の 30 歳代の女性である。彼女は、大学を卒業し、外資系メーカーに秘書として勤める一児の母親で、ムスリムだが、スカーフは被らず、世俗主義的なライフスタイルを採用している。この研究協力者は、次のような見解を示した。

まず、トルコ人移民の一般的傾向として、親族集団内の血縁を契機とする移住が広範に認められる。よって、移民先では、同じ地域に居住するトルコ人住民は、移住前のトルコにおける血縁集団とそれにつながる地域コミュニティが同じである傾向が強い。また、ドイツのトルコ人移民の多くは、トルコにおける都市部ではなく、農村部からの移民である。トルコの農村部では、都市部とは異なり、伝統的に世俗主義の浸透は薄く、住民の大半は、ムスリムとしての保守的なライフスタイルを維持している。それぞれの移民たちは、同じ血族集団あるいは村落の出身者であることが多く、よって、かれらはその血族集団が属するイスラム共同体<sup>23)</sup> のメンバーであることが多い。このイスラム共同体では、多くの場合、それに属する女性信徒の被り物や服装について、どのような様式が好ましいかについて細かな指導が行われ、女性信徒はそれに従う傾向が強い。デュッセルドルフのトルコ人街で観られる女性ムスリムの被り物や服装がよく似ているのは、そのためである。

この協力者の見解を、別のトルコ人協力者に示して反応を求めた。この協力者は、イスタンブル在住で、大学で教鞭をとる女性研究者であり、海外に移住したトルコ人女性の文化変容について調査研究をしている。彼女は、自身の研究結果に照らしても、この見解は妥当で

デュッセルドルフ（ドイツ）のトルコ人集住地区の街頭映像に現れた宗教／エスニック表象に対する…

あると述べ、さらに、これらムスリム女性は、移民先でもトルコ人コミュニティが主要な生活空間であり、そこで自分たちの出身地の文化やライフスタイルを維持し、移民先のドイツ社会と接触する機会は、男性たちに比べて、はるかに少なく限られているだろうと付け加えた。

当該地区で視認したトルコ人女性ムスリムの被り物や服装が高い類似性をもつ理由については、これら研究協力者へのインタビューでおおよそ確認することができた。

最後に、これらの女性ムスリムたちの被り物がトゥルバンであることの、もう一つ別の意味を考察しておきたい。

トルコにおける女性ムスリムの被り物については、チャルシャフ、バシユオルトゥス、トゥルバンの3つの型があることは、すでに述べた。この中で、トゥルバンの概念を改めて想起したい。前述のエミリット紙によれば、トゥルバンとは、バシユオルトゥスに分類される衣服の中でも、とくに都市部に住む教育を受けた若い女性が自己主張をもって、あるいはファッションとしての意識をもって着用する衣服を指す被り物の形態であった。しかし、デュッセルドルフのトルコ人街での調査では、たしかにそこで撮影された13人のムスリム女性たちは、すべてトゥルバンを着用していたが、それらは、エミリット紙が指摘するような「教育を受けた女性の自己主張、都市性、ファッションなどの要素を含む被り物」とは異質であるといわねばならなかった。というのも、彼女たちの着用していたトゥルバンは、イスタンブルでトゥルバンを着用する若い女性たちのそれとは明らかに異なり、ファッションのもつ都市性、変則性、自己主張などの要素を欠き、研究協力者たちの指摘にあるように、逆に、村落的、慣習的、自己規制的な意味付けを与えられているように思われたからである。これらの意味付けは、イスタンブルにおいては、むしろ、バシユオルトゥスをかぶる女性に対して与えられてきた意味付けである。ところが、デュッセルドルフでは、トゥルバンがそれにとって代わっている。同じ被り物が、本国の社会と移民先の社会とで、まったく異なった文脈を構成していることに気付かされるのである。

このように、イスタンブルのトゥルバンとは異なった独自の文脈において着用されているトルコ移民女性のトゥルバンが、ムスリム女性全般に対して向けられるドイツ社会のまなざしに影響を与え、本国トルコにおいては、むしろ革新性や自立性の文脈で理解されているトゥルバンを被る女性たちですら、ドイツの人々が「ヨーロッパ的な価値観とは相容れない、抑圧された女性」とみなしてしまう原因を作っているのではないかとの印象をもつに至った。

しかし、いずれにせよ、今回の調査はあくまで試行的な段階にとどまるため、これらの調査結果の綿密な検討は、今後の課題として残された。

## F. 附論～トルコ系ムスリムの宗教施設（ジャーミー<sup>24</sup>）への訪問調査～

ところで、収録と並行して、対象地区周辺のムスリム文化への理解を深めるため、デュッ

セルドルフ周辺のトルコ人の宗教施設への訪問調査を行った。その結果を附論として加えたい。

デュッセルドルフ近郊で生活するトルコ人ムスリムにとって、いくつかのジャーミーがその宗教的生活の場を提供している。その一つで、デュッセルドルフ市に隣接し、その近郊住宅地としての性格をもつラーティンゲン市にあるアヤソフィア<sup>25)</sup>・ジャーミー(写真16参照)を訪ねた。施設を案内してくれた男性スタッフによれば、この施設は、DİTİB<sup>26)</sup>を始めとする地元のトルコ・ムスリムとトルコ政府の支援によって、1997年に建設が着工され、1998年に開設された。総面積は1,000平方メートルを超え、尖塔(ミナーレ)を含む建物の高さは17メートルに及ぶ。このジャーミーは、尖塔が一つ高くそびえ、また、最上階にはドーム型の屋根が設けられており、この付近を通り掛かる者には、この建物がイスラム教の宗教施設であることを遠目にも歴然と判別することができる。

建物の一階部分には、トルコ人の日常生活に必要な物品を販売するスーパーマーケットが併設されている。(写真17参照)このスーパーマーケットでは、ハラル認証食品をはじめ、スパイスや豆類、茶葉など、トルコ料理の必需品でドイツの一般商店では入手の難しい食品などが販売されている。また、ジャーミーの地上階には、談話室(写真18参照)やカフェテリアが併設されており、地下には、キッチンとダイニングホールが設けられている。我々が訪問したときは、ちょうどラマザン(断食月)の最中であったため、ダイニングホールでは、日没を合図に始める食事<sup>27)</sup>(イフタル)の準備(写真19参照)が数名の男性信徒によって進められていた。また、その奥には、礼拝時の準備として欠くことのできない、身体を水で清める水場(チェシメ)(写真20参照)が設けられている。

礼拝場は階上にあり、ここでは男性信

写真16 イスラム教宗教施設、アヤソフィア・ジャーミー



写真17 アヤソフィア・マーケット



写真18 アヤソフィア・ジャーミーの談話室



デュッセルドルフ（ドイツ）のトルコ人集住地区の街頭映像に現れた宗教／エスニック表象に対する…

写真 19 アヤソフィア・ジャーミーのダイニング  
ホールとキッチン



写真 20 礼拝のために身体を清める水場



写真 21 アヤソフィア・ジャーミーの礼拝場



写真 22 礼拝場の壁に掲示されたトルコ国旗



徒と女性信徒が別々の入り口から入退場できるように設計されている。(写真 21 参照) トルコの一般的なジャーミーでは、礼拝場については男女の分離が行われるものの、入退場の入り口が男女別になっていることはなく、この点で、入り口における男女の分離は、このジャーミーの特徴といえる。その他の礼拝場の空間設計については、基本的にモスク一般の構造を踏襲している。前方にメッカの方角を示すアーチ状のミフラーブが造形され、それに向かって右側に説教壇（ミンベル）があり、後方部分には、クルアーンやイスラム教に関する文献などを収めた書架があり、説教に際して使われる拡声器等の機材を保管するスペースがある。

もう一つトルコ国内のジャーミーと異なっている点は、後方の壁にトルコ国旗が掲げられていることだ。(写真 22 参照) このジャーミーがムスリム一般ではなく、トルコ・ムスリムの宗教施設であることをこの国旗が象徴している。

さらに礼拝室の上の階には、地元に住む若い世代のトルコ人たちのためのイスラム教室が配置されており、また、成人のためのセミナー室や会議室が設置されている。子どもたちのための教室は、ドイツの初等教育外の時間帯に開かれ、トルコ語を主として、一部アラビア語によるイスラム教教育が提供されている。

子どもの教室前方の白板の上部には、トルコ語で「ようこそ、ラマザン」と飾り文字で綴られた緑色紙のバナーが飾ら

れ、白板には、「私は礼拝の準備をしています」とトルコ語の例文が示され、それに続いてトルコ語で礼拝方法が示されていた。(写真23参照) また、もう一つの教室には、「最初に顔を洗うこと」などと、沐浴の手順がトルコ語で示されていた。(写真24参照) トルコ語の習得とイスラム教の教義学習が同時にできるようプログラムが設計されているようであった。

モスクの建築学的な研究で知られる羽田正は、モスクの機能として、礼拝の場、教育の場、憩いの場、政治活動の場、象徴としての存在、という5つの機能を指摘している<sup>28)</sup>が、このアヤソフィア・ジャーミーもそれらの機能を備えているとよい。

また、スタッフとのインタビューをとおして分かったことは、この施設が地元のトルコ人たちにとって、たんに

宗教施設としての役割を担うだけでなく、エスニック・コミュニティの紐帯を維持する上で重要な結節的役割を担っていることであった。執筆者の一人<sup>29)</sup>は、ハワイの日系仏教寺院の調査を行ってきた経験をもつ。その経験に照らして、移民社会において宗教施設の果たす機能の多義性がそこから理解できるように思った。日本社会ではもっぱら死に関する儀礼や儀式を行うことに機能が狭められている仏教寺院が、海外の日系社会においては、広く日系人社会の紐帯の結節となり、また、キリスト教に習って日曜礼拝を行うなど地域の日系高齢者にとって重要な交流空間となっていることなどと、一連の共通性をそこに見ることができた。このアヤソフィア・ジャーミーも、羽田が指摘する5つの機能に加えて、移民集団としての現地トルコ人たちにとっては、エスニック・アイデンティティの一つの拠り所でもあるに違いない。

最後に、この訪問で最も興味を引いたものの一つは、これら教室が配されているフロアの壁に、オスマン帝国のスルタンであるメフメット2世によるコンスタンチノーブル征服(東ローマ帝国の側からみればコンスタンチノーブル陥落)を描いたポスター(写真25参照)が掲示されていたことである。

写真23 アヤソフィア・ジャーミーの教室白板

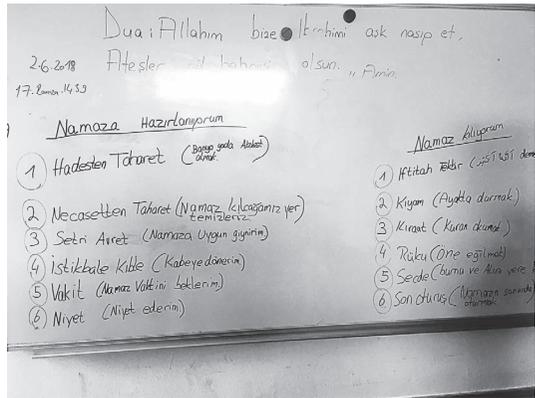


写真24 アヤソフィア・ジャーミーの子ども用教室





をトルコ・ムスリム民族主義へと誘う強いメッセージとなりうる。しかし、トルコ語を母語としない移民第2世代以後のトルコ系人にとっては、そのポスターのメッセージは、理解不能な「なにもの」かであるか、あるいは、トルコ語の習得とトルコ史の学習によって始めて理解することのできる、自身の出自を想起させる程度のものに過ぎないかもしれない。

他方、このようなポスターがドイツのジャーミーに掲示されていることを、ホストとしてのドイツ社会がどのように受け止めるかで、トルコ移民が集う宗教／エスニック施設に対してホスト社会が投げかけるまなざしも異なってくるだろう。これをホスト社会ドイツへの統合を拒否するトルコ人の排他的エスノセントリズムの徴候、さらに、ヨーロッパのキリスト教的秩序に対するムスリムからの挑戦として理解するのか、それとも、たんに祖国を離れた移民者たちにありがちな望郷的な故国愛の一形態として理解するのかで、ホスト社会の側に微妙な差が生じてくるだろう。地元のドイツ人たちが、トルコ語で表記されたこのようなポスターがこの場所に掲示されていることを果たして知っているのかいないのか、我々にはわからなかった。

案内をかってくれた中年の男性スタッフに対して「ここに（移住して）きて、イスラム教徒であることで、何か嫌な目に遭ってはいませんか」とトルコ語で質問をすると「そんなことは何ともありません」との回答がトルコ語で返ってきた。ただ、近年、ドイツでは国内にあるジャーミーに対するヘイトスピーチなどの嫌がらせが増加しているとのメディア報道もあり、緊張がまったくないということではないのかもしれない<sup>35)</sup>。

#### 注

- 1) 関西学院大学総合政策学部教授，社会学博士（関西学院大学）。本論では，A，B，C，Dを担当した。なお，論文全体をとおして山中が調整を担当した。
- 2) 関西学院大学経済学部非常勤講師，文学博士（イスタンブール大学）。本論では，C，D，Fを担当した。
- 3) 2018年度関西学院大学特別研究助成を得て実施された。
- 4) 科研番号24530609 基礎研究（C）「可視化する地域社会の宗教／エスニック文化の比較映像分析～大阪生野とイスタンブール」2012～2014年度，研究代表：山中速人
- 5) 山中速人「コリアタウン（大阪市生野区）の映像記録の方法と実際：防振ステディカムを使用したフィールドワークの試み」『日本都市社会学会年報29』2011年9月，pp.25～37. にその理論的特徴と技術的方法が詳説されている。
- 6) 今和次郎が1925年5月の4日間に東京・銀座で行った風俗記録調査は，今日でも，都市の文化景観の記録の方法として，きわめて重要な知見と示唆に満ちている。この東京銀座風俗記録は，今和次郎と吉田謙吉が日本で初めて組織的に行った街頭風俗を記録する調査活動であった。今和次郎に対する今日的評価を代表する論評として，萩原正三，石黒いずみ他編『今和次郎採集講義』青幻舎2011年p.118では，今らの方法について「この調査の重要な成果は，道行く人々の行動を網羅的に記録すること」であったと指摘している。

デュッセルドルフ（ドイツ）のトルコ人集住地区の街頭映像に現れた宗教／エスニック表象に対する…

- 7) 関西学院大学総合政策学部紀要『総合政策研究』（43号）2013年6月10日，pp.83～105.
- 8) これを可能にしたのは、執筆者の井藤が、トルコ文学研究者として、トルコ語に関して支障のない会話能力を有するだけでなく、留学を含めて17年間にわたってトルコの各地で生活してきた経験を有することにある。
- 9) デュッセルドルフ市公式ウェブページ Landeshauptstadt Düsseldorf (<https://www.duesseldorf.de/>) からの引用
- 10) 今回の撮影では、機械式スタビライザーは使わず、デジタル・スタビライザーを内蔵した小型カメラ（キャノン iVIS mini X）を用いた。撮影条件は、フルハイビジョン標準画質での録画（1080×1920ピクセル）縦横比 9: 16, 30P（プログレッシブで1秒間に30フレーム）、録画記録形式は、mp4形式であった。レンズの焦点距離は、35mmフィルム換算で35mm相当に設定した。
- 11) ピーター・ウォーレンによれば、類似記号（アイコン）とは、類似性、近似性によって、意味するものが意味されるものを表現する記号である。（ピーター・ウォーレン『映画における記号と意味』フィルムアート社，1975年）
- 12) パン屋ではトルコ語の文字表記ではないものの、lavas や pide, börek など、トルコ語の商品名をドイツ語で表記しているものもあった。
- 13) ピーター・ウォーレンによれば、指標記号（インデックス）とは、意味するものと意味されるものが固有の関係をもっているために、その性質を示す記号である。（ピーター・ウォーレン，前掲書）
- 14) ピーター・ウォーレンによれば、象徴記号（シンボル）とは、意味するものと意味されるものが、社会的文化的約束事によってそれを表現する恣意的な記号である。（ピーター・ウォーレン，前掲書）
- 15) Parlatur, İsmail (Haz), *Türkçe Sözlük 1, 2*, 9. Baskı, Türk Tarih Kurumu Basım Evi, Ankara, 1998. この辞書は、トルコでは中等教育段階で広く用いられ、最も普及した辞書の1つである。
- 16) Baş örtüsü: Kadınların saçlarını örtmek için kullandıkları örtü.
- 17) Türban: İnce kumaştan yapılmış, başı sıkıca kavrayan bir tür baş örtüsü.
- 18) Çarşaf: Eskiden kadınların kullandığı ve baştan örtülen, pelerinli, etekli sokak giysisi.
- 19) <http://www.milliyet.com.tr/2003/05/27/guncel/agun.html>
- 20) Ahmet Hakan, Türban ile baş örtüsü arasındaki 12 fark, *Hürriyet*, Dec. 5, 2007, <http://hurarsiv.hurriyet.com.tr/goster/haber.aspx?id=7812976&yazarid=131>
- 21) 分類は、対象者のジェンダーについて、観察者の視認によって行われたものであり、対象者の生物学的な性差を示すものではない。
- 22) M. バンクスは、エスニシティ研究に応用された映像誘発法として、ベトナム系中国人とベトナム人の境界を明らかにするために、写真を対象集団に見せ、インタビューによってそれぞれのエスニシティを示す目印を探り出す手法について詳述している。マーカス・バンクス，石黒広昭・監訳『質的研究におけるビジュアルデータの使用』新曜社，2016年，p. 89。（Marcus Banks, *Using Visual Data in Qualitative Research*, SAGE Qualitative Research Kit 5, 2007.）
- 23) 同じジャーミー（モスク）に通い、そのジャーミーで集団礼拝を差配する指導者（イマム）によって指導される信徒共同体のことを指す。それぞれのイマムが、イスラムについての知識にもとづいて、教義に適した服装などの形を推奨する。

- 24) 日本では一般的にモスクと称されるが、トルコ語ではジャーミー (Cami) と呼ばれる。
- 25) アヤソフィアは、イスタンブルを代表する著名な建築物であり、ビザンチン帝国時代に、建設された巨大教会をオスマン帝国の侵入と支配が始まった後、イスラム教のジャーミーに改修された経緯を有する。今日、世界遺産として登録される建築物である。
- 26) DITIB はドイツ語とすれば「トルコ・イスラム宗教施設連合」、トルコ語 (DİTİB) とすれば「トルコ・イスラム宗教問題連合」と訳するのがよいだろう。イスタンブルのネットメディア (Odatv, 2017年2月25日付) によれば、DİTİB は、ドイツにおけるトルコ・イスラム教関連の団体として活動が続けてきたが、近年、トルコ政府が財政的人事的影響を強めているとして、キリスト教民主同盟や緑の党から批判を受けている。
- 27) ラマザンの最中は、日没を告げるエザン (ezan) を合図に、一斉に断食明けの食事が開始される。ただし、トルコ本国のように拡声器等を使ったエザンの呼びかけは、騒音にならないようにとの配慮で、このジャーミーでは、通常行っていないとのことだった。
- 28) 羽田正『増補モスクが語るイスラム史～建築と政治権力』ちくま学芸文庫, 2016年, pp. 32-44.
- 29) 山中速人「ハワイ・カウアイ島サトウキビ・プランテーションにおける日系人二世のライフストーリー調査報告」『コミュニケーション科学』12号, 資料 (CD-ROM), 2000年3月
- 30) 19世紀後半に、オスマン朝宮廷画家が描いたコンスタンチノーブル征服の絵画。イスタンブル軍事博物館所蔵。
- 31) 原ポスターでは、Kostantiniyye とある。これはオスマン・トルコ語でコンスタンチノーブルを意味する。
- 32) この戦役は、近代トルコ史の重要事項としてトルコでは位置づけられている。イギリスでは、ダーダネルス戦役と呼ばれている。また、この戦役にはるばる南太平洋から参加したアンザス同盟軍には敗戦による多大な犠牲が生じた。アンザス同盟軍の一翼であったニュージーランドでは、オークランド博物館内の戦争記念館 (War Memorial) で、「ガリポリへの侵略」(Invasion of Gallipoli) と「ガリポリでの賭け」(Gamble at Gallipoli) の表題を掲げて、丁寧な展示を行っており、それによれば、3ヶ月続いた対オスマン戦線の膠着を打開し勝利を手にしようとイギリス軍の指令によって総攻撃をかけたが、成功せず敗退した。この8ヶ月に及ぶ戦役で、双方10万2千人の将兵が戦死し、ニュージーランド軍の戦死者は2千700人に及んだと記されている。また、並行して、戦地から送られてきた従軍兵士の手紙も音声展示され、この戦争の悲惨さを伝えている。この展示を2018年8月に観覧した林勲男氏 (国立民族学博物館教授) によると、この戦役についての評価は、同じく参加したオーストラリアにも共通しているとのことで、ともに、侵攻についての歴史的評価は否定的かつ反省的であると述べている。
- 33) ただし、どちらかといえば、前者のトルコ・イスラム主義が後者のトルコ・ナショナリズムより突出している。というのも、一般にトルコでは、チャナッカレの戦いにおけるトルコ軍の勝利は建国の父であるアタチュルク将軍の功績として称揚される傾向が強いが、ここではアタチュルクの名前すら登場せず、それらの功績のすべてが預言者ムハンマドの預言と結び付けられているからである。
- 34) コンスタンチノーブルの征服がムハンマドの預言であるという言説については、トルコだけでなく、アラブも含むムスリム社会に広く伝播している認識である。ただ、ムハンマドはその征服がトルコ人によるものであるとは言及していないとされている。

デュッセルドルフ（ドイツ）のトルコ人集住地区の街頭映像に現れた宗教／エスニック表象に対する…

35) ドイツ内で発信されているトルコ語のネットメディア MUHABIRCE (2017年10月21日付記事) による。

#### 参 考 文 献

Ahmet Hakan, Türban ile baş örtüsü arasındaki 12 fark, *Hürriyet*, Dec. 5, 2007.

萩原正三, 石黒いずみ他編『今和次郎採集講義』青幻舎 2011年。

羽田正『増補モスクが語るイスラム史～建築と政治権力』ちくま学芸文庫, 2016年。

マーカス・バンクス, 石黒広昭・監訳『質的研究におけるビジュアルデータの使用』新曜社, 2016年。

Parlatır, İsmail (Haz), *Türkçe Sözlük 1, 2*, 9. Baskı, Türk Tarih Kurumu Basım Evi, Ankara, 1998.

ピーター・ウォーレン『映画における記号と意味』フィルムアート社, 1975年。

山中速人, 井藤聖子「都市における宗教的表象と地域のアイデンティティ～イスタンブル（トルコ）における街頭映像の記録と分析～」関西学院大学総合政策学部紀要『総合政策研究』（43号）2013年6月10日, pp. 83～105。

山中速人「ハワイ・カウアイ島サトウキビ・プランテーションにおける日系人二世のライフヒストリー調査報告」『コミュニケーション科学』12号, 資料 (CD-ROM), 2000年3月。

山中速人「コリアタウン（大阪市生野区）の映像記録の方法と実際：防振ステディカムを使用したフィールドワークの試み」『日本都市社会学会年報 29』2011年9月, pp. 25～37。